神さまにとって問題になったお金とは？

ー安政4年「神の頼みはじめ」の出来事からー

大林浩治です

■お金の問題って何？

「私たちはどんな時代に生きていますか？」

毎年、学院生のみなさんにこんな質問をしていますが、必ず一人や二人はお金に関わった答えがあります。「いまは何でもお金があれば手に入る時代」とか「お金のものさしが猛威をふるっている」とか、「お金を払った人が偉く、何をしても許されるような錯覚があるのでは」など。そう言って、いまの時代を問題にしています。

あるとき、考え込んでしまいました。「確かにそう。でも、その答えで、何を言ったことになるのだろう？」と。何でもお金があれば手に入る。そうした現実は問題には違いありません。じゃあ、そんな現実に対してどうあればいいのだろう？　それは私にとって、突き詰めて考えてこなかった問題でした。

今回、紀要論文で取り上げたのは、そんな問題を考えてみたくなったからでした。

今日ここでもその論文の内容に関わってお話ししたいのですが、それに関わって、お金で問題に感じられる場面を取り上げてみたいと思います。

＊プロジェクト・プリベンションという慈善団体があります。これは、１９９７年ノースカロライナで始まった薬物・アルコール依存者の避妊手術をすすめる活動団体です。その団体は、こんなチラシを配っています。「避妊手術を受ければ300ドル提供します！」と。このお金は、生まれる子どもの不幸の除去のため、中毒者の生殖能力の封じ込めと引き替えに支払われるのです。11月19日現在で1ドル121.55円ですから、300ドルは3万6千465円。このチラシを見て手術を受けた人はほとんど女性だそうです。赤ちゃんを産むことを断念して3万6千円の現金を得る。イギリスでも活動していて、医師会が問題にしたそうです。「20代の若い時期にお金のために避妊をして、30代になって回復した後で後悔することを考えるとぞっとする」と。

＊ニューハンプシャーのスーパー、ウォルマートの副店長が仕事中に死亡しました。そのとき会社は当人や家族にも知らさずに３０万ドルを保険にかけていました。その保険金は遺族にはわたらず、会社にわたりました。会社の主張はこうです。彼のトレーニングにかかったコストであり、また急なことで後任の配置にかかったコストの埋め合わせだ。

＊その年にどの有名人が死ぬかに金をかけるデスプールは、ウェブサイトで提供されています。不慮の死を遂げたダイアナ妃には特別ポイントがついたそうです。

＊２００３年ペンタゴンは、外国のどの指導者が失脚したり、暗殺されるかを賭けたウェブサイトを提案（Policy Analysis Market、PAM）しました。メディアは「テロの先物取引」と呼びました。世論の激しい批判を浴びた米国防総省は，ニュースが流れた翌日、プロジェクトを中止させています。

＊１９８０年代から始まった生命保険買取事業は、余命少なく医療費が必要な人物から証券を買い取り、代わりに毎年の保険料を支払うというものです。投資家はその人が予定通り死んでくれれば大儲けするのです。また２０００年、

６５歳以上の健康な人から保険証券を買い取り、投資家に売る「ライフセトルメント」事業が興ります。保険に入っていない高齢者に加入させ、それを転売する業者が現れました。今は３００億ドル事業にまで成長したとされています。

いずれも人の死が堂々と金銭取引の観点で見られていることがわかります。これらはNHKの「ハーバード白熱教室」で知られたマイケル・サンデルの『それをお金で買いますか』から得た情報です。サンデル氏は「市場を道徳的に限界づけなければならない。そのために善とその価値観についての熟議が必要だ。そうでないと市場が代わりに答えを出してしまう」と訴えます。この訴えは大事でしょう。一方でこんな事を考えてしまいます。市場主義が問題にされているけれどもあくまでも市場の存在が前提になっていて、市場主義の補完や是正の議論になっている感がします。市場主義は貨幣経済がもとで成り立っています。となると貨幣経済の底から問題にし考えていく構えも必要になってくるかもしれません。でも、そうとしてその構えに信心はどう関わりがあるというのでしょう。

■私の関心

貨幣経済、資本主義経済への私の関心について、もう少し述べたいと思います。

今、グローバル資本主義の時代で、国際競争が激化しています。巨額な投機資金によって、一瞬にして一国の経済が左右されるほどです。「日本を取り戻す」、「国益が大事」といったスローガンがありましたが、それはもはや伝統を重んじる声ではありません。市場活性化をねらって出ています。ＴＰＰ（環太平洋戦略的経済連携協定）も、安保法制もその中でのことでしょう。そんな中、「お金」で暮らす社会（経済）をどう考えればいいかが問題になってきます。

2006年の時点だそうですが、世界経済全体の規模はおよそ3000兆円だそうです。これは各国GDP（その国の経済規模を示す指標）の合計額とされています。しかし、地球上の総貨幣量、流動貨幣はその倍の6000兆円をはるかに上回り、実体は把握し切れないのだそうです。これほどにありあまったお金が世界中を駆けめぐっているわけです。自己増殖を続けるために、意図的に戦争を作り出したりして、利益を上げていく世の中になっています。世の中は、好況・不況に関わらず、常に投機的なスタイルで利益を追求しています。「金融はもうかる」と言われる裏側で進むのは、こうした資本主義の危機的状況です。

こんな経済の始まりのところへ目を向けて見たいと思います。「いろんなモノに値段がついている」、これは『資本論』を書いたマルクスの驚きです。「この世界は、商品世界。人間も労働力商品だ！」というわけです。モノはみんな価格で取引されます。お金が物言う世界です。「何ちゅうこっちゃ!!」と問題にしたのがマルクスです。それとちょうど同じ時期、教祖さまのところで、そんな世界が問題になる出来事が生じたことに注目したいと思います。

もちろんマルクスのいた西洋社会と日本社会は違います。でも、マルクスが問題にした「お金」は、幕末維新の日本で浸透しています。それにより教祖さまのところでも、モノは違って見え始めているのです。「いろんなものをみ〜んな値段で見ちゃってる!?」。連ドラのあさちゃんの言葉で言うような「びっくりぽんや!!」。この驚きは、教祖さまにあったでしょう。神さまはそんな世の中にあって教祖さまに声をかけました。それは世界の動き、歴史の動きとどう関係しているのでしょうか？ 現代の危機的な資本主義経済に対して、あのときの神さまの言葉から何を思えばいいのでしょう？ 人間の、いまと未来にどういう意

味をもつのでしょう？ 信心のこととして、それを考えてみる必要がありそうです。

■ドタバタ騒ぎとしての安政四年の出来事

さて、今言った出来事は、安政四年（一八五七）十月十三日に起きました。「覚帳」冒頭に見られる出来事です。弟の繁右衛門に乗りうつり、なんと神さまはお金を無心するのです。よりによって、教祖さまを名指しで。家を建てるのでお金を貸してくれと。弟の要求に見えますが、弟は覚えていません。ですから、これは弟の願いをくみ取ってはいるけれど、神さまの要求なのです。

弟を無意識に動かすことができる神さまです。それほどの神さまでもお金がいるというのです。そもそも神さまにお金が必要なのでしょうか？そう考えると、どうもお金が問題になったというよりも、問題になるところでお金がいる、それこそが家の建築で問題になっているような気がします。

この出来事について、最近、興味深い藤本拓也くんの研究（「お知らせ体験の深まりに見る宮建築の移ろい　―「神の頼みはじめ」とその無起源性をめぐって―」紀要『金光教学』第52号）が発表されました。藤本くんは、こう解釈します。建築費依頼の背後にあるのは弟が疎んじられている状況だった。すぐさま神さまの依頼に教祖さまは応じている。それは疎んじられた弟の痛みに応じることであり、教祖さまは「根にかなうだけのことをいたしましょう」と言っている。それは底なしの応じ方で、それが「神との関わり合い」を深めていくきっかけになっている。そう見るとこの出来事は「神の頼みはじめ」にふさわしいのじゃないか。

藤本くんは、このように「頼みはじめ」にふさわしい意味を求めていきました。一方、私は、この出来事をこう考えてみました。そもそも神さまは、教祖さまに「頼みはじめ」という意味を理解して欲しくて頼んだんじゃないよね!!と。そもそも神さまもわけ知らずお金を頼んでいるよ。そんな、「どさくさ騒ぎ」の意味を考えることも、案外、大事じゃない？と。

どさくさ騒ぎ。そこから見えてくるのは何でしょう？どさくさ騒ぎの中に神さまが登場しました。その現場は、わけがわからないほど大きな歴史とか社会とかの仕組みが絡み合っています。そんな仕組みの事を「社会構造」なんて言ってます。社会構造っていうとわかった気になるかも知れませんが、ほんとうは人間には容易に理解できないものなのです。歴史とか社会とかってそんなものなんですよね。

社会構造って、人間の意識を無自覚に縛りつけているものです。だから、人が時にわけしらず、もがき、苦しんだりします。それこそそんな風に人間をかんじがらめにしている社会構造がもたらす必然性によるのです。神さまは、そんな風に縛り付けられた人間を見て、もどかしくて出てきたんじゃないの？と思うのです。

神さまが頼んだのはお金ですが、そんな「お金」には、無意識に縛り付けられた人間の苦しみの問題が被さっているでしょう。この出来事からは、「お金の世」がすでに全面化していることも見えてきます。その中で人間が苦しんでいる。新たな「お金の世」が登場したけれど、人間の思いの方はうまく「すりあ

わせ」ができていません。そんな裂け目、ひずみから、神さまが登場したのではないでしょうか。そして、その登場によって神と人間との関わり合いが生まれるきっかけになったのです。

そうであれば、この出来事には、時代や社会を捉えながら、丸ごと人間の助かりへ導いてくださるような、信心の意味が隠れていることになります。私たちの信心のはじまりのところで、世の中に向けたまなざしがセットされていることになるのです。

今回、こんなことを論文で見ていったのですが、内容に関わって確かめたかった問題があります。それは、今言いましたがこのお道にセットされている、社会的な意味であり、時代や社会を突く意味が信心にはあるということです。「さすが、教祖さまのお心は、他とは違うね。実意な方だ」なんて言って落ち着いてしまうような問題。これは内心倫理化と呼ばれたりするのですが、信心する者の心構えばかりが問題になってしまうと、少し行き過ぎのようになります。心の問題として、自分を苛んだり、あげくのはてには人を責めてしまったり…。それは、信心をそんな価値観で捉えている証拠です。しかも本人は自覚していません。またそこから、社会へ向けて広がっていくあり方がたらないという不足も生んでいます。そうした信心の心構えも何に関係して出ているのか、そういったところから考えてみなくちゃならないのでは。

そんな期待を込めながら、より詳しくあの出来事を見ていきましょう。近代資本主義（貨幣経済）が始まる時期、神さまからのお金の依頼に応じたことが、神との関わりの最初とされるあの出来事を。きっと、「頼みはじめ」とされる神との関わりは、貨幣経済に向けて重大な意味をもつはずです。さらには、この出来事を見ることで、神との関わり（信心）が時代や社会にとって持つ意味を見ることになるように思うのです。

■弟の状態に見えるのは？

さて安政四年の出来事へ。再び注目しましょう。それは弟の状態です。弟の意識全面を占拠して、神は乗り移っています。神さまの登場の仕方は、弟の抱える個人的事情にとどまりません。

考える方向をこのように整えたいと思います。たちまちに弟の乱心ぶりが問題になるのですが、そうであるにしても最も大事になるのは、この世界は、人間をこのように現出させている、それこそが問題だということです。

弟の個人的事情にとどまらない大きな状況（人間を取り巻く歴史・世界の動き）こそ、超人間的領域に住む神さまが問題にしていたものではないかと。神さまはそこから訴えていたのです。

神さまの訴えにどういう性格があらわれているでしょうか？お金を人から借りることが出来ない弟。それ自体は個人の事情であり、もちろんその事情にそって神さまは訴えています。でも、語る神さまの口ぶりはそれを超えています。そこから見る要がありそうです。

弟の事情から生じたけれど、そこには、個人の事情を超えた問題状況がある

ことになります。そしてそれが神さまの登場の仕方に関わっています。ですから、教祖さまは、弟の個人的事情を超えた何かがあると勘づくことになったでしょう。翌朝、教祖さまはそれを確かめています。弟は答えています。「覚えていない」と。

どうも訴えには、神さまにとっても言いしれない、もどかしさがあったようです。「どうかお金の依頼を聞き入れ、そうして問題を解いてくれ」とでもいうような。たしかに費用負担は、弟の問題解消につながります。でも、より問題となるのは、人間がそうなっている問題でしょう。神さまは「援助を通じて解いてくれ」と訴えているようです。

いよいよ問題の本丸です。ではその問題に関わったお金って、いったい何でしょう？

■ たった十匁」

「難儀につき、屋敷宅がえいたすに銭なし。たった十匁も借る先もなし」。これが神さまの訴えです。「たった」という言い方、少し気になりませんか？「難儀」のようすが金額であらわされているんですよ。「たった十匁」と。そもそも難儀は金額の高低で問題にされるものだったのでしょうか？そうじゃなかったはずです。そもそも難儀なので家の建築が出来ない程だということです。けれど家の建築の方から難儀が見返されています。そして家の建築から難儀が推し量られて「たった十匁も借りられない」という額面を言いながら難儀が語られるのです。

ここに重要な問題があります。この問題は、お金をやりくりする世の中が生んでいる、そのことを証している。お金のやりくりが、人の日常意識に浸透して、こんな形としてあらわれています。「たった十匁」は、そうした問題化を示すのです。生きる上に欠かせない「もののやりとり」（経済）に、金銭取引が全面化している何よりの証拠でしょう。

「たった十匁」。今でどれくらいでしょう?安政四年、大谷村の米相場を見てみますと、米１石が銀１２８匁５分です。１石は約１５０kgですから、この銀価格から米を換算し直すと、銀１０匁は米の11.67kgになります。米は玄米ですが、とりあえず白米として考え、現在の一般価格帯（米10kgを4000円）で換算しなおすとどうなるか。米11.67kg（銀10匁分）は、現在の価格で4668円になります。そうなると銀10匁はだいたい5000円たらずです。

でも、「今の金額でどれくらい？」と考える、そのこと自体が問題なのです。金額にして、わかった気になるのが現代人ですが、問題は、それに慣れきった人間の考え方なのです。たしかに銀十匁はあまりにもわずか。それほどの金銭も借りられない弟も問題。とはいえ、問題を「たった」と確認しているところにはお金での交換を当然としている問題（今の私たちの問題でも）があるのです。

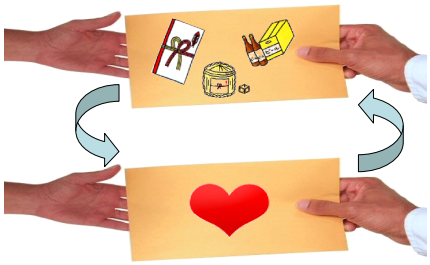
お金は意識の背後で私たちを縛っていると言いましたが、そう見ていただくと、この問題の意味もわかっていただけるでしょう。弟の無意識に訴え出た神さま、また教祖さまにも不分明な、問題の正体がこれです。

すでに目の前は、お金がもの言う「商品世界」です。あらゆるモノがお金で売り買いされています（建築資材、大工の労働など）。お金は、いつでも何にでもモノと交換可能です。逆は困難で、モノが売れなければお金は手に入りません。かつて「百円でカルビー・ポテトチップスは買えますが、カルビー・ポテトチップスで百円は買えません。悪しからず」(1977) というコマーシャルがありました。これはそのことを言っています。モノ達の中で、お金は特権的地位を占めます。

お金以外のモノは、いつしかすべてお金（貨幣）との交換から見られるというわけです。これがいまの経済世界です。

もちろんいつの世も、お金だけじゃない、無償の助け合いとか、心の交流、物資の提供はあるでしょう。しかしそうでありながら、世の中はお金が支配的です。問題はそんな現実です。たしかにお金は、生きていくためにかかせません。しかも、それ以外にはありえないと思わせるほど。教祖さまと同じ時代のマルクスは、そんなお金の謎を解明しようとしましたが、神さまは、そんな時代を前に教祖さまに姿をあらわしたのです。

■「こづかい、酒まで」



ところで、その後の教祖さまの行動を見てみましょう。安政四年十月十四日に大谷にもどった教祖さまは、また十八日に伺います。そのとき弟は普請にかかっており、普請が成就するまで手伝いました。その間、教祖さまはこづかいや酒まで贈り、お金の心配がいらぬように動いています。そうして建築は安政四年十二月に完成しました。

「こづかい、酒まで」贈ったとありますが、ここからは大事な意味を見ることができます。「こづかい」は、補助的な経費であり、お金です。そのお金は、「何にでも変わるお金の性質」を発揮するでしょう。でもその発揮の仕方に大きな違いがあることになります。というのも、そこでのお金はこづかいだからです。建築のために使用されるわけでもないお金です。でも建築に関わって使用されるでしょう。それはどういうことかというと、こづかいは、建築という「ものごと」をうまく運ばせるために使われるます。建てばそれでいいというような意味で求められたお金が、建つことで済むわけじゃない人間のあり方をも含む見方の中で見返されているのです。「心配ないように」との精神的な作用、情緒的な関わりから家を建てることが見返されるのですが、心配りの問題から、建築が見返され、その心配りの上にお金がおかれているのです。

何から何まで「心配ないようにいたし」。そこから見返されるのが建築とお金です。こづかいも含めてお金を見てみるとどうなっているでしょうか？当初は、建築が必要だからと言われ、求められたお金です。でも、それだけに限りません。人と関わることがらとして、お金が置き直されているのです。そのお金は、「何が何でも建てばいい」として必要なお金ではなく、「どう建てばいいのか」という「建築への意味」を見直させるのです。それが精神的関わりに浮かぶお金として見出されているのです。

■「いくらかかる？」で成り立つ社会に向けて

ここから、その出来事が「神の頼みはじめ」とされるにあたっての大事な意味をうけとることができそうです。それは難儀とお金の関係に、神さまの依頼とそれを受けた出来事全体を見返す作用が生じているということ。またそこから、人と人との関わり（信頼）や神さまに対する「信」が喚起されたという意味がうかがえるのです。そこには貨幣経済の理屈の考え直しを迫る問題もあるでしょう。「そもそも人間社会の中で、どういうモノとして金銭は必要とされるべきなのか？」を突きつけていますし、「金儲けの理屈で世の中が成り立っていると

いうような考えじゃいけません！」というそんな指摘が、どういう根底の次元から発せられるかを考えさせてくれる問題です。

「それ、いくらかかる？」、こんな意識を持って生きるほかない世の中が貨幣経済社会です。人間が生きていく意味、価値を、貨幣のものさしで見る社会です。「いくらかかる？」で成り立つ社会です。私たちは、貨幣のものさしで見ていく世の中を当然として、生きなければなりません。それを認めつつあの出来事を思い返してみましょう。弟に乗り移った神さまは、そうした金銭取引の現実にあってお金を求めていたということを。また、それに応じてなされた援助は、何を生んでいたのかと。

「人間の生きた働きは、お金に換算できない」といくら言ったところで、実際はそこに「お金がいくらかかる」と考えなければならないのが、いまの世の現実です。弟の苦しみは、そんな現実から生まれています。でもそれは、弟だけに限りません。今を生きる人間の問題です。人間意識を規定するその威力ははかりしれません。でも、そうだとして、こんな理屈がどう用意されているのかを見ることはできるのです。そしてそれを見ることは、私たちにとってすれば、「信心はじめ」の問題をつかむ事を意味します。信心の力を「信じること」、そして、世の中を見返す信心の働きを明らかにすることにつながるのです。現実を見返す作用もそこに備わっているでしょう。

■まとめ

以上、まとめてみます。「頼みはじめ」の出来事には、問題となる世の中を見返す作用が組み込まれていました。それを見ることは社会的な意味を帯びた信心の意義確認でもあります。また、その見返す作用上に、神さまは、人と関わることを約束してくれました。

あの出来事が告げているのは、人間の生きた働きへの信頼、神への信は、貨幣経済が進む中に生まれなければならなかったという問題です。そこには本教の信心が生じる歴史的必然性が関わっていないでしょうか。その歴史的必然性は人類史の視野で信心を見ることを意味します。それと同時に、教祖さまの援助からは、今の世の仕組み（資本制）が決して「永遠の自然形態」でないことをも見させるのです。それが信心展開の必然性として理解されていくとき、信心を価値づける新たなステージが神さまから私たちに求められている。それを理解していくことになっているでしょう。